

たて の 立 野 第 5 遺 跡
たて の 立 野 第 2 遺 跡

Tateno No 5 Site

Tateno No 2 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 49

2007

宮崎県埋蔵文化財センター



北東側上空より立野第5遺跡、立野第2遺跡をのぞむ



名貫川以北の地形



立野第5遺跡VII層出土石器群

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書は、その発掘調査報告書です。

本書に掲載した立野第5遺跡及び立野第2遺跡は平成17年度に調査され、後期旧石器時代の石器群や礫群、縄文時代草創期から早期にかけての集石遺構等が確認されました。特に、立野第5遺跡で、姶良Tn火山灰直下より出土した石器群は、当時の剥片剥離技術を明らかにする上で良好な資料といえます。

本遺跡の位置する都農町域で、旧石器時代遺跡の発掘調査が本格的に行われましたのは、平成17年度の東九州自動車道建設に伴う一連の発掘調査が初めてであります。このことにより、今まで不明確であった、当地域で旧石器時代から続く、歴史の有機つながりが明らかになりつつあります。ここに報告する成果は、今後、地域史を解明していくうえで貴重な資料となることでしょう。

また、本書が学術資料となるだけではなく、生涯学習や学校教育の場の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係諸機関及び地元の皆様に深く感謝を申し上げます。

平成19年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 清野 勉

例言

- 1 この報告書は東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した都農町立野第5遺跡及び立野第2遺跡の埋蔵文化財発掘調査に関するものである。
- 2 発掘調査は、日本道路公団の委託により宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書中では日本道路公団として記載する。
- 3 現地での実測図作成、写真撮影は安藤利光、日高優子、児玉幹を中心に行った。
- 4 立野第5遺跡では、空中写真撮影を（有）ふじた航空写真、測量杭設置を（有）久保田測量設計、自然科学分析を（株）古環境研究所に委託して行った。
- 5 本書で示す北は、基本的に磁北（M.N.）である。座標北を示す場合は「G.N.」と表記している。
- 6 本書で使用した土層断面、遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」による。
- 7 地図は国土地理院発行の1/25,000・1/50,000の図を使用して作成した。
- 8 遺構・遺物の実測図作成は、整理作業員の補助を得て日高が行った。また、石器実測図の一部は、（株）バスコと（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 9 本書では遺構の略号を次のように用いる。
SC… 土坑 SI… 環状・集石遺構
- 10 遺物実測図の縮尺は、石器類2/3または1/2、土器類1/3とした。縮尺は図中に明記している。
- 11 本書の編集、執筆は日高が行った。
- 12 出土遺物及び記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査・整理の経過	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	4
第Ⅲ章 立野第5遺跡の調査	
第1節 層序と地形	6
第2節 確認調査の概要	9
第3節 調査・整理の方法と方針	9
第4節 旧石器時代	11
第5節 繩文時代	61
第6節 小結	64
第Ⅳ章 立野第2遺跡の調査	
第1節 層序	68
第2節 確認調査の概要	70
第3節 調査・整理の方法と方針	70
第4節 旧石器時代	71
第5節 繩文時代	76
第6節 小結	85
第Ⅴ章 立野第5遺跡と立野第2遺跡の調査を通して	86

挿図目次

第1図 東九州道（都農～西都間）関連の遺跡位置	3
第2図 周辺遺跡分布図	5
第3図 土層模式図	6
第4図 調査区グリッド配置図及び土層断面図	7～8
第5図 周辺地形と確認調査トレント配置図	10
第6図 VII層上面検出縦群	12
第7図 VII層上面遺構・遺物分布図	12
第8図 旧石器時代（Ⅵ層）の石器 1	13
第9図 旧石器時代（Ⅵ層）の石器 2	14
第10図 旧石器時代（Ⅵ層）の石器 3	15～16
第11図 旧石器時代（Ⅵ層）の石器 4	17
第12図 旧石器時代（Ⅵ層）の石器 5	18
第13図 旧石器時代（Ⅵ層）の石器 6	19
第14図 旧石器時代（Ⅵ層）の石器 7	20
第15図 旧石器時代（Ⅵ層）の石器 8	21
第16図 旧石器時代（Ⅵ層）の石器 9	22
第17図 旧石器時代（Ⅵ層）の石器 10	23
第18図 遺物接合状況分布図	25
第19図 I類縞群 1	28
第20図 I類縞群 2	29
第21図 II・III類縞群	30
第22図 III類縞群	31
第23図 IV類縞群	32
第24図 SC1・SC2	32
第25図 SI22	33
第26図 AT上位構造配置図	33
第27図 旧石器時代（AT上位）の石器 1	34
第28図 旧石器時代（AT上位）の石器 2	35
第29図 旧石器時代（AT上位）の石器 3	36
第30図 旧石器時代（AT上位）の石器 4	37～38
第31図 旧石器時代（AT上位）の石器 5	39
第32図 旧石器時代（AT上位）の石器 6	40
第33図 旧石器時代（AT上位）の石器 7	41
第34図 旧石器時代（AT上位）の石器 8	42
第35図 旧石器時代（AT上位）の石器 9	43
第36図 旧石器時代（AT上位）の石器 10	44
第37図 旧石器時代（AT上位）の石器 11	45
第38図 旧石器時代（AT上位）の石器 12	46
第39図 旧石器時代（AT上位）の石器 13	47
第40図 旧石器時代（AT上位）の石器 14	48
第41図 旧石器時代（AT上位）の石器 15	49
第42図 旧石器時代（AT上位）の石器 16	50

第 43 図	旧石器時代(AT 上位)の石器	17	51
第 44 図	縄石刃文化期の石器	1	52
第 45 図	縄石刃文化期の石器	2	53
第 46 図	縄石刃文化期の石器	3	54
第 47 図	縄石刃文化期の石器	4	55
第 48 図	AT 上位遺構と遺物の関係図		55
第 49 図	旧石器時代(AT 上位)の石器	1 8	56
第 50 図	旧石器時代(AT 上位)の石器	1 9	57
第 51 図	旧石器時代(AT 上位)の石器	2 0	58
第 52 図	旧石器時代(AT 上位)の石器	2 1	59
第 53 図	AT 上位遺構と縦分布の関係		60
第 54 図	AT 上位遺物分布図		61
第 55 図	縄文時代の遺物		62
第 56 図	縄文時代の遺構		62
第 57 図	土層断面図		69
第 58 図	確認調査トレンチ配置図		70
第 59 図	SI16 実測図		71
第 60 図	旧石器時代の石器	1	72
第 61 図	旧石器時代の石器	2	73 ~ 74
第 62 図	旧石器時代の石器	3	75
第 63 図	集石遺構実測図	1	78
第 64 図	集石遺構実測図	2	79
第 65 図	縄文時代早期の石器	1	80
第 66 図	縄文時代早期の石器	2	81
第 67 図	縄文時代早期の石器	3	82
第 68 図	遺構配置図		82
第 69 図	縄文時代早期の土器	1	83
第 70 図	縄文時代早期の土器	2	84

表目次

第 1 表	Ⅴ層検出縦群観察表		12
第 2 表	Ⅴ層出土未掲載遺物観察表		25
第 3 表	I・II・III類縦群観察表		27
第 4 表	IV類・その他の縦群観察表		32
第 5 表	AT 上位出土未掲載遺物観察表		59
第 6 表	集石遺構・土坑観察表		62
第 7 表	集石遺構観察表		77
第 8 表	石材分類表		88
遺物観察表			
立野第 5 遺跡			
・石器			90
立野第 2 遺跡			
・石器			95
・土器			96

写真図版

図版 1	立野第 5 遺跡調査区近景		98
	調査区全景		
	遺跡北東側 K - A h 落ち込み		
	確認調査風景		
	二次堆積黒色土堆積範囲		
図版 2	SI 2 北西側より		99
	SZ1 半截状況 東側より		
	SZ2 半截状況 西側より		
	SE3 東側より		
	SI14 西側より／縦群の痕跡		
	SI27 北側より		
	SI13 北東側より		
	SI23 東側より		
図版 3	SC2 検出状況 北側より		100
	D5・6、E5・6Gr. VI層相当縦群検出状況		
	SI35 北側より		
	SI41 北西側より		
	Ⅴ層出土接合資料 1		
図版 4	Ⅴ層検出縦群と石器集中区		101
	Ⅴ層出土石器集中区		
	Ⅴ層接合資料 1 部品		
	Ⅴ層出土黒色系流紋岩の石器群		
	Ⅴ層出土ホルンフェルス石器群 (1)		
	Ⅴ層出土ホルンフェルス石器群 (2)		
	Ⅴ層出土その他の石材 (ホルンフェルス等)		
	Ⅴ層出土頁岩・砂岩の石器		
図版 5	VI層出土黒色系流紋岩石器群		102
	黒色系流紋岩石器群		
	白色系流紋岩石器群		
	ホルンフェルス石器群 (1)		
	ホルンフェルス石器群 (2)		
	縄石刃期の石器群		
	尾鷲山酸性岩類の石器		
	巖石類		
図版 6	立野第 2 遺跡遺跡		103
	立野第 2 遺跡基本土層		
図版 7	SI1 東側より		104
	SI2・3 散攤検出状況 南側より		
	B 区 構造検出作業風景		
	B 区 散攤・集積構造検出状況 北側より		
	SI4 北側より		
	SI6 南東側より		
	SI9・10 東側より		
	SI14 北側より		
図版 8	B 区石器集中区		105
	SI16 東側より		
	旧石器時代の石器		
	旧石器時代石器接合資料		
	縄文土器 (1)		
	縄文土器 (2)		
	縄文時代早期の石器 (1)		
	縄文時代早期の石器 (2)		

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道延岡～清武間は平成元年に基本計画がなされた。平成9年3月には門川～西都間については整備計画区間となり、このうち都農～西都間は同年12月に建設大臣（現国土交通大臣）から日本道路公团へ施行命令が出された。その間、県教育委員会では、平成10年度に延岡～西都間の決定路線上の詳細な遺跡分布調査を行ない、それに基づき埋蔵文化財保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響を受ける部分については工事着手前に発掘調査を実施することとなった。

調査は平成11年度から日本道路公团の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターで実施している。なお、日本道路公团は分割民営化され、平成17年10月1日から西日本高速道路株式会社九州支社宮崎工事事務所・延岡工事事務所となった。

第2節 調査の組織

立野第5遺跡及び立野第2遺跡の調査・整理報告は以下の組織で実施した。

調査主体

宮崎県教育委員会
宮崎県埋蔵文化財センター

(平成17年度)

所長 宮崎健一
副所長兼調査第二課長 岩永哲夫
義務課長 宮越 尊
主幹兼義務係長 石川健史
調査第一課長 高山富雄
主幹兼調査第一係長 長村宗重
主幹兼調査第二係長 普付和樹

調査担当

調査第二係
主査 安藤利光
主査 松林博樹
主事 日高優子
調査員 児玉 幹
整理担当
調査第二係 主事 日高優子

(平成18年度)

所長 清野 勉
副所長兼調査第二課長 岩永哲夫
副所長 加藤四郎
義務課長 宮越 尊
主幹兼義務係担当リーダー 高山正信
調査第一課長 高山富雄
主幹兼調査第一担当リーダー 長村宗重
主幹兼調査第二担当リーダー 普付和樹
整理担当
調査第二担当 主事 日高優子

調査指導

泉拓良（京都大学）、小畠弘己（熊本大学）、田崎博之（愛媛大学）、野口淳（明治大学）、広瀬和雄（国立歴史民俗博物館）、木田道輝（鹿児島大学）、柳沢一男（宮崎大学）

（五十音順、敬称略・所蔵は当時）

第3節 調査・整理の経過

確認調査は立野第5遺跡、立野第2遺跡とも平成17年6月1日から行われた。確認調査の結果をうけ、立野第5遺跡は確認調査対象面積の一部、立野第2遺跡は確認調査対象面積全てを、本調査することを決定した。

本調査は平成17年9月1日から12月27日の期間、立野第5遺跡と立野第2遺跡、そして立野第1遺跡の確認調査と3遺跡並行して行われた。複数遺跡を同時に調査することから、また、立野第2遺跡は調査面積が限られ、雇用した作業員全員を調査区内に投入することができないことから、常に二つ以上の調査区を同時に動かさざるを得なかった。そのため、特に立野第5遺跡では作業員4、5名で作業を行うこともあり、調査の前半は作業が遅々として進まない状況が見られた。9月29日に立野第1遺跡、10月31日に立野第2遺跡の調査、12月26日に立野第5遺跡の調査を終了した。両遺跡とも天候の影響や予想を上回る遺構・遺物のため、調査期間の延長を行った。当初の終了予定は立野第2遺跡は9月29日、立野第5遺跡は11月29日であった。調査中は作業

員を始めとする多数の方々から数々の協力と助言を得た。

遺物の整理作業、報告書作成作業は平成17年12月から平成18年11月まで埋蔵文化財センター本館で行われた。また旧石器時代の礫整理事業は平成18年4月から9月まで川南町尾花A遺跡に設営された整理作業棟で行った。報告書は、平成18年度から当センターで取り組まれているデジタルデータでの原稿作成が行われた。最終的にAdobe社のInDesignで入稿され、写真図版のみ従来どおり版下での入稿となつた。

平成18年7月29日に、遺跡を語るひむかの歴史(平成17年度発掘調査報告会)が県立図書館で開催され、その一つとして立野第2遺跡の報告がとりあげられた。

本調査日誌抄

太字は立野第5遺跡に関する項目、斜体字は立野第2遺跡に関する項目である。

0901 (木) 重機にて表土剥ぎを行う。

0902 (金) 重機で表土剥ぎ開始。確認調査の結果をうけ、鬼界アカホヤ層(以下KAH)まで除去。調査事務所の設営。

0905 (月) ~ 0906 (火) 台風14号が来襲。

0907 (水) 作業員投入開始。

0908 (木) 表土剥ぎが終了し、作業員の投入を開始。

0909 (金) アカホヤ上面まで人为的剥離、精査を行うが、遺物とともに確認されず。コンタクト地盤のみみだる。

0912 (月) ~ 13 (火) 清掃坑の設営。

0912 (月) 重機でKAK層まで除去。

0914 (水) 調査区外まで削離がつかれていることを確認。

0921 (水) V壁下トレンチ調査をする。

0922 (木) 土壌断面を確認し、A区調査を終了。

0926 (月) 人力での包含層精査を開始し、石器が出土。赤化鐵の集まりを確認。

0927 (火) 重機でKAK層の除去を行っていたところ、水在場が確認しているのを確認したため、直前に表土剥ぎを進める。

0927 (火) 遺物のトータルステーションによる点上げを開始。細石刈根等出土。

0929 (木) 立野第1遺跡第二次確認調査終了。

1004 (火) 敷地東に遺構調査区を設置して読みることがわかり、人力で検出作業を行う。

*この時期雨天による調査中断が多い。

1004 (火) 調査区を報査横断する長い土壌確認トレーンチを設定し、掘削を行う。

1006 (木) 水道がないため、調査区内に水を確保するための溜池を作る。以後、雨水や逆瀝した水を溜めて使用。

1011 (火) 敷地を除き、奥石垣調査を認定する作業を行う。

1018 (火) V壁より裏面を検査。

1019 (水) 奥石垣調査、確認作業終了。

1019 (水) 上層の堆積層況と、遺物が削離層の出土層を反映せず、また、局所的な堆積が多く観察されることから、遺物の削り取り上げは混乱をまぬくと判断。肩位を記録しない追跡取り上げを開始。

1021 (金) V壁より右側塗装区を確認。V壁上面でコンタクトを作成し、下層のトレーンチ調査に入る。X壁まで人力で削削するが、遺構・遺物は確認されなかった。

1026 (水) 土壌の洗浄確認、断面確認の作業を行う。立野第1遺跡から搬出しにおいて堆土を搬入し、埋め戻しを行った調査を終了。

1027 (木) ラジコンヘリで航空写真を撮影。立野第2遺跡の遺景も同時に撮影する。

1101 (火) 裸眼の検査が増える。特に小型のもののが目立つ。

1109 (水) 重機で表土除去部分を拡張する。拡張部分から数基の礫部を検出。

1110 (木) 調査指導委員会が来訪。

1115 (火) 先行トレーンチで調査を行っていた箇所は、トレーンチ調査のみで十分と判断する。

1129 (火) AT直下より多量の石器が出土し始める。

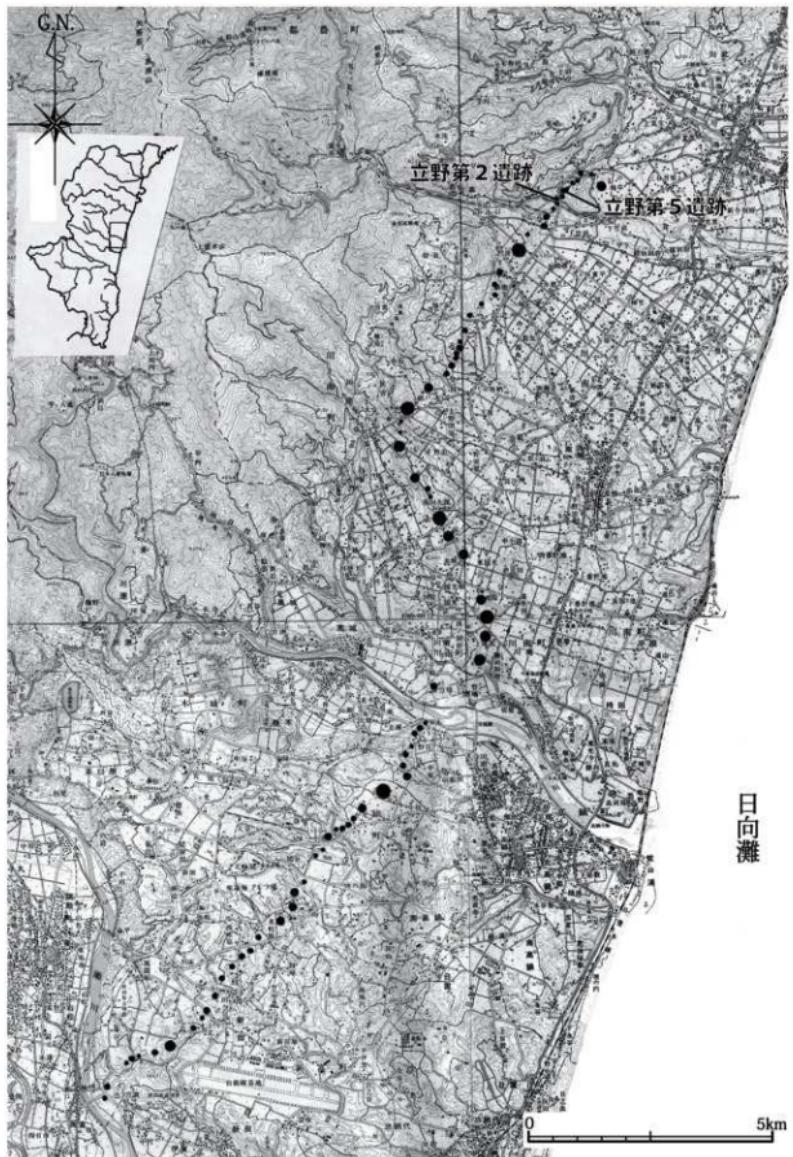
1205 (月) AT直下より礫部を検出。

1212 (月) 土壌断面を作成。

1221 (水) 最後の包含層削離を行いつながら、重機で埋め戻しを開始(作業員引出済み)

1222 (木) 埋め戻しが終了。現地での確認理、遺構埋土のふるいかけ等の作業を行う。

1227 (火) 事務所の撤去、器材の搬出が完了し、調査を全て終了。



第1図 東九州自動車道（都農～西都間）関連の遺跡位置（1/100,000）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

立野第5遺跡及び立野第2遺跡は都農町大字川北字竜ヶ平に所在する。都農町は宮崎県中央部よりやや北側に位置し、段丘・扇状地群からなる台地から特徴づけられる宮崎平野を形成する北端部最後の地域となっている。東は日向灘に面し、南は名貫川を境に川南町、西は木城町、北は海岸側が日向市、山地側が東郷町に接している。西側には尾鈴連山を有し、その麓に台地群が広がっている。海、河川、山地域それぞれの恩恵を受け、豊かなバイオマスを得ることのできる地域である。

これまで都農町内での発掘調査はほとんどなく、当地域の遺跡が明らかとは言い難い。

しかし、都農町は古くは『日本書紀』にも日向國一ノ宮（都農神社）との記述が見られるように、歴史的環境内に恵まれたところであることが想像できる。

実際に遺跡が所在する字は竜ヶ平であるが、両遺跡名にはその近隣字名である「立野」が付されている。「立野」の名称は神武天皇にまつわる伝説に由来すると言い伝えられている。

遺跡は都農町南端部、川南町との境をなす名貫川左岸の台地上に位置している。立野第2遺跡は名貫川によって形成された2段目の河岸段丘面にある。立野第5遺跡は、地元民の信仰を集める大師堂を有する大師山の鞍部にある。両遺跡の間には確認調査のみ行われた立野第1遺跡があり、谷地形の中に、押型文土器の破片や赤化粧が流れ込んだ状態で出土した。

以下、周辺行政地域を含め遺跡を中心に時代ごとに概観していく。

旧石器時代

町内ではこれまで、縹期の遺物が層中から出土した資料は報告されていなかった。しかし、大野寅夫氏採集資料「黒萩」出土の尖頭器に加え、1987年の遺跡詳細分布調査では又猪野原遺跡、京塚遺跡で剥片が採集されており、町内でも旧石器時代遺跡が存在することが確実視されていた。平成17年度の東九州自動車道建設に伴う発掘調査では本書報告遺跡を始め、朝倉遺跡、尾立第3遺跡、朝草原遺跡で

それぞれAT下位から上位にかけて旧石器の遺構・遺物が確認され、その層構造が明らかとなった。

名貫川対岸の川南町でも多くの縹期遺跡が確認されている。近隣では瀬戸内技法関連の剥片が出土した歳坐村遺跡がある。

縄文時代

上記の朝倉遺跡、尾立第3遺跡、朝草原遺跡で縄文時代草創期から早期の遺構・遺物が確認されている。町教育委員会で発掘調査された白水遺跡と黒石遺跡では集石遺構が確認され、早期の押型文土器、無文土器が出土している。確認調査や分布調査で縄文時代とされている遺跡から見つかっている遺物は、早期の所産が主である。

弥生時代

発掘調査が行われた中には、新別府下原遺跡で中期から終末、境ヶ谷第一遺跡で後期後半、白水遺跡で後期の集落跡がある。新別府下原遺跡では多数の弥生土器や鉄鎌が出土した。他に瀬戸内系の土器が出土した森遺跡でも住居跡が検出された。名貫川対岸、2段目の河岸段丘に位置する八幡第2遺跡では、後期の住居跡が調査されている。

古墳時代

海岸部に県指定古墳12基を含む、古墳群がある。円墳が集積されており積石塚とされているが、詳細な調査は行われておらず確定には検討を要する。新別府下原遺跡では初頭の土器が見つかっている。

古代以降

律合体制の時期、町内は太宰府と日向國府を結ぶ官道が通り、駅が設けられた要衝の地であった。「去飛」駅が設定されているが、詳細な位置は明らかになっていない。また、馬鹿の設置された地でもあり都磨野・長野等の地名として残っている。

近世には高鍋藩の支配下にあった。古代以降の良好な遺跡は都農町内では見つかっていないが、川南町削跡第1遺跡では中・近世の多数の掘立柱建物跡と土坑墓が確認されている。

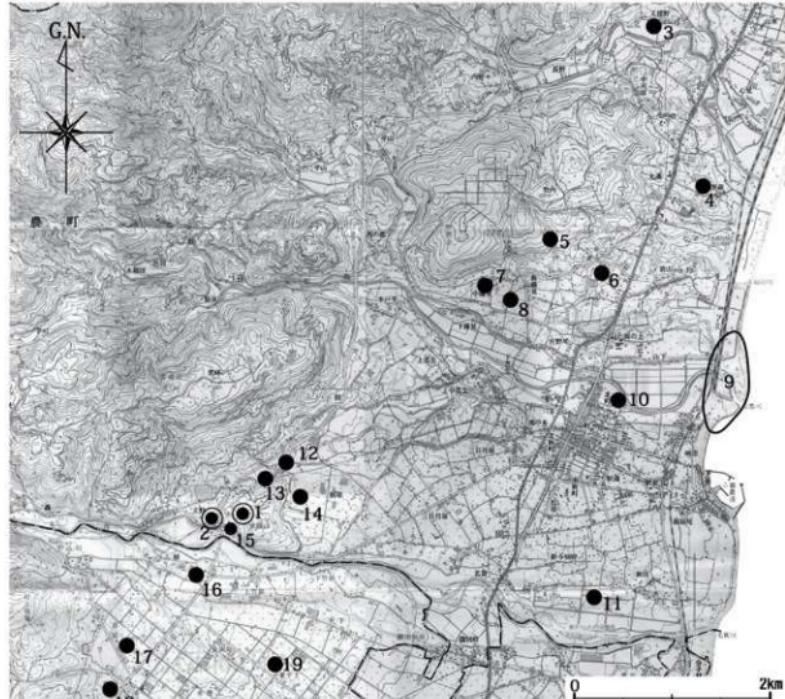
当地域は開拓地域であったため、本来の地形が大幅に改変を受けている場合が多く、削平された遺跡

も数あったことが推察される。墾地の際、壺や甕がでるのをたくさん見たという話を今でも聞くことができる。土地利用は、みかんを中心とした果樹園から、オレンジ輸入自由化以降果樹園が衰退した後は、ハウス栽培が行われ、近年は梅の樹齢が盛んである。

都農町内には、明治時代から昭和33年に廃線になるまで、尾鈴国有林から木材を搬出するための林用軌道鉄道が設置されていた。軌道は尾鈴山から大師山の北側を通り都農駅まで施設され、トロッコが使用されていた。木材運搬だけではなく、住民の重要な交通手段の一つとなっていました。往事を記憶している町民も多い。

【参考文献】

- 1998『都農町史』通史編 都農町
2006『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書VI』宮崎県埋蔵文化財センター
1997『宮崎県史』宮崎県
1981『宮崎県開拓史』宮崎県
1931『宮崎縣史蹟調査報告』第5輯 児湯郡之部 宮崎縣
1990『新別府下原遺跡』都農町文化財調査報告書 第3集 都農町教育委員会
1988『都農町遺跡詳細分布調査報告書』
都農町教育委員会



1.立野第5遺跡 2.立野第2遺跡 3.又猪原遺跡 4.黒萩遺跡 5.白水遺跡 6.境ヶ谷第一遺跡 7.京塚遺跡
8.黒石遺跡 9.都農古墳群 10.森遺跡 11.新別府下原遺跡 12.朝倉遺跡 13.尾立第3遺跡
14.朝草原遺跡 15.立野第1遺跡 16.八幡第2遺跡 17.銀座第1遺跡 18.蔵山村遺跡 19.東平下遺跡

第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

第Ⅲ章 立野第5遺跡の調査

第1節 層序と地形

本遺跡の土層堆積は、水流等による堆積の乱れと開墾等による土地改変に特徴がある。

確認調査対象面積13,500m²の内、北西側は斜面下を削平し、その余土を斜面上に盛って2段の平坦面を形成している。南側斜面も削平された後、余土は立野第1遺跡方面の畑地造成に使用されている。さらに、鞍部中央を削り周囲に盛ることで平坦面を拡張している。その結果、本遺跡は調査開始時3段の広い平坦面が続く地形となっていたが、本来は起伏に富み、斜面の広がる地帯であったと推測される。鞍部東側の高まりは地山が完全に露出している。

また、各所に湧水による影響と考えられる窪地や何筋にも走る谷地形が確認された。谷地形はATが落ち込むもの、KAhが落ち込むものの両者があった。水流の痕跡である、白い砂層が確認される箇所も存在した。これらと関連して、調査中には以下の現象を確認している。

①耕作権者には、2~3m掘り下げておくと自然に水が湧き出す、という話を伺った。②FT6では夏季に3箇月以上放置していたにもかかわらず、壁面は絶えず湿っていた。③MII層上面に出遭物に多量のATがこびりつき、水洗後も完全にはとれなかった。後に、水洗が多い箇所で火山灰がバッ

第3図 土層模式図 網掛けは遺物包含層
△△は遺構検出面

層名	基本土層	基本土層に対応しない層
I	表土	
II	アカホヤ火山灰	
III	黒褐色土	
IV	暗褐色土 △△	IV
V	暗褐色土 △△	
VI	褐色土 △△	A: 褐色土
VII	始良 Tn 火山灰	B: 黒褐色土
VIII	暗褐色土 △△	VII
IX	褐色土	VIII
X	黄褐色土	IX
X I	イワオコシ	
X II	白色粘土	X II

A: V・VI・VII のない箇所に堆積(V以下)の層を含む二次堆積土
B: 二次堆積土又はV・VIの変質したものか

クされた状態の剥離に起きた場合がある、とのご教示を得た。

④EBGrに突如10cm程度の穴が開いたので棒を差し入れたところ、約2m下で滲水層を確認した。穴は調査前のボーリング痕跡であり、地下の水みちを抜いていたのであろう。

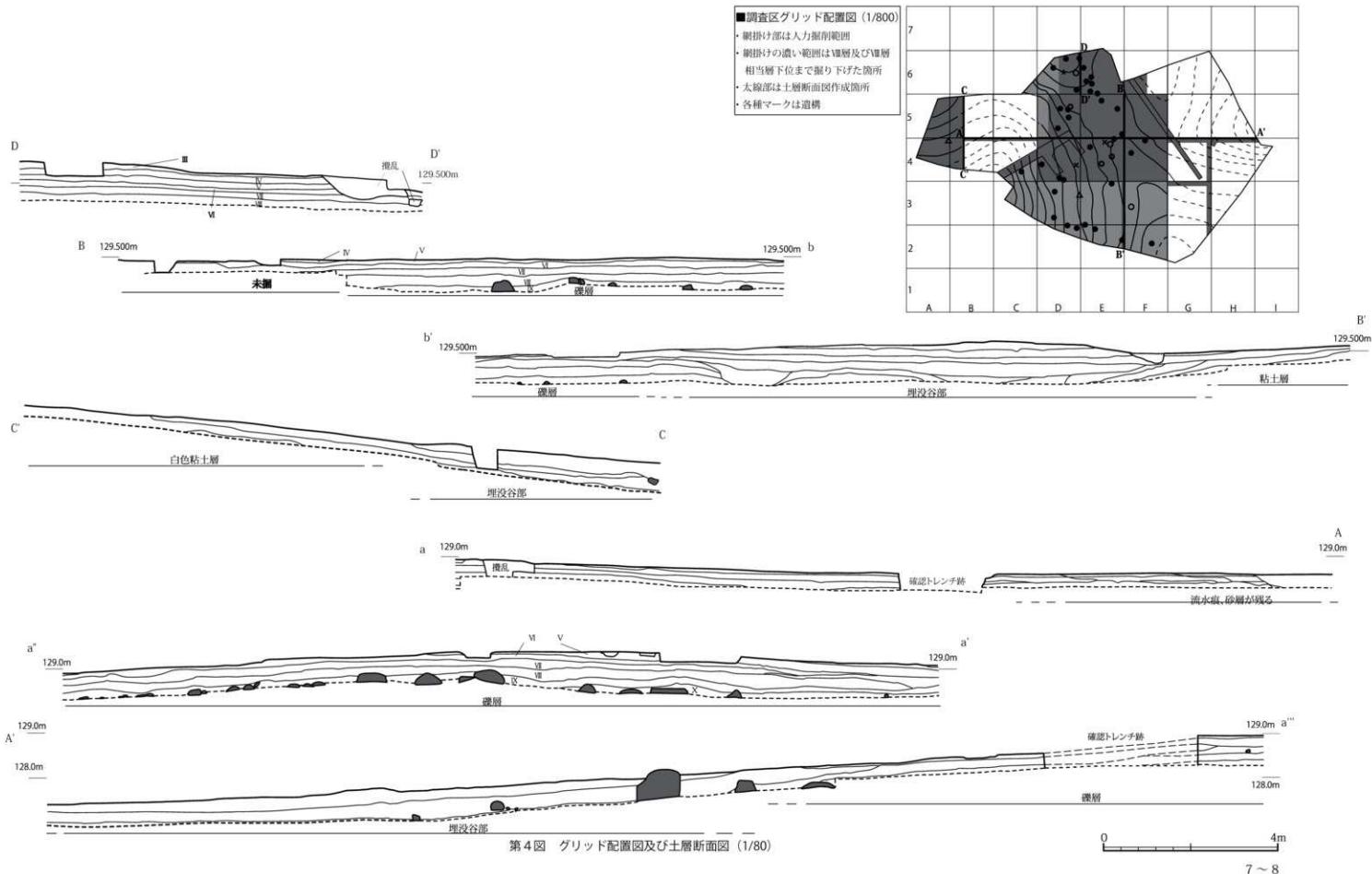
以上のように、調査区内は、本来はいくつかの起伏となだらかな斜面が広がっていた。また、窪地、湧水の存在に加えて斜面地であることが原因し、調査区全体にわたって堆積している層は存在せず、地点によって土層の堆積が一様ではない。二次堆積層も多く形成されている。

調査区内の地形変遷を整理すると下記のようになる。まず、AT降灰以後ローム層が流水等の作用で影響をうける時期があり、地形によって再堆積層ができる箇所とATが良好に残存する箇所が存在した。その後、再堆積層や本来の堆積層上面に遺構が形成された。流水等の作用と遺構形成はKAh降灰以降まで幾度か繰り返された。そのため、遺構が早い段階であっても異なる層位で検出される可能性が高く、遺物も原位置を反映しない。従って遺構や遺物の出土層位に不整合が生じている。

土層断面図は全体的な堆積状況を明らかにするため、グリッドラインに沿って調査区内全体を縦横断する形で作成した。基本土層はD6GrとE4Grを合成して作成し、比較的広範に見られる二次堆積土を含め模式図に示した。また、模式図に対応しないさら局所的な層もあり、色調・しまりは各所で大きく異なっている。

AにはAT由来と思われる粒子が混じる。VII・IX層はいわゆるMB2・MB3にそれぞれ対応するが、通常確認されるものよりもやわらかく、色も薄い。やはり水分の影響であろう。また、その傾向は鞍部最高所から離れるほど顕著となる。III層はいわゆるMB0に対応するものであるが、谷地形の上面では非常に硬かった(乾燥地にはねじりでも削れない程)。III層は、本来的にはD6・EBGrにのみ存在すると考えられる。

最も安定した層位を保っていたのはD6・E5~6Grで、VII層以下に関してはD6・E4~5・F4~5Gr、次にD5・F6Grの順で残りが良い。なお、層位の安定性と遺構の検出量は比例しない。



付着物、赤化、破損状況を記録した。礫群内→礫群間→周辺礫と接合範囲を広げていった。フエキ糊で接着し、割れ面の観察ができるようにした。接合作業終了後、法量、赤化、破損状況の再観察を行い、収蔵へ向けて準備した。赤化的判断については一人の人間が行うようにした。

石器整理

出土した遺物はセンターに持ち帰り水洗、注記作業を行った。土器はほとんど出土せず、しかも摩滅していたため、石器についてのみ接合作業を行った。接合作業を行いながら石材を順次分類していく。分類は見た目、手触りを重視して仮の名称を付しながら行った。最終的な石材同定は肉眼観察で、赤崎広志の協力を得て日高が決定した。石器実測・製図は292点を業者に委託し、残りをセンター内で日高と作業員とで行った。実測物選定にあたっては石材ごとに剥片剥離の流れがおえるものを中心に抽出した。製図は作業員の協力を得て調査員が行った。

原稿作成

原稿作成は、当センターで本年度から取り組ん

でいるデジタル処理で行われた。使用された主なソフトはアイシン精機「トレースくん」、Adobe社PhotoshopCS2、IllustratorCS2、InDesignCS2、Word2003、Excel2003である。写真図版は従来とおり版下で入稿された。

3 磕群の設定方法

礫群はその周辺に散らばる赤化礫の疎密により、設定があいまいになる部分があった。明らかに密集しているものは認定が容易だったが、中には非常に線引きを迷うものも存在した。礫の散漫さが、礫群とも、周辺礫とも認めづらいもの、或いは礫が集まっていても点数が少なすぎるものについては、礫群に準ずるものとして、トータルステーションで点データのみおさえた。その他の礫は周辺礫として取り扱い、グリッド単位での沿岸線とどめた。

当センターの発掘調査マニュアルでは、礫群の基準は1点でも礫が存在すれば礫群としている。しかし、今回の調査では上記のように、礫が周囲に比べ相対的に密集している部分をSIの名称を付し、図化を行った。

